

力太郎と天狗 (木器)

羽束山(はつかざん)のてつぺんの岩には、何やら足形らしいくぼみがある。天狗(てんぐ)が千丈寺山(せんじょうじざん)にひとつ飛びした跡(あと)らしいなど、言われている。本当のことは誰も知らないが、そのあたりに天狗が住んでいたことはまちがいないらしい。

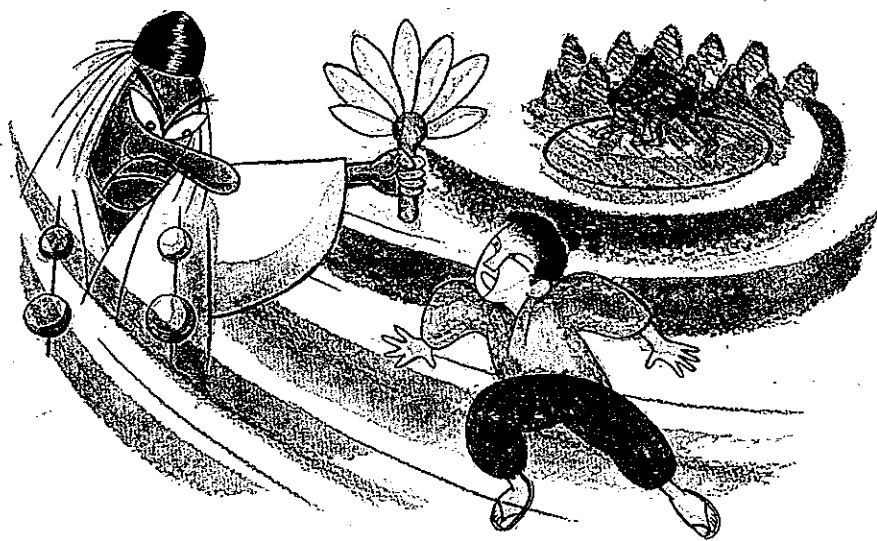
この羽束山のふもとの木器村(こくつき)に、体の大きな太郎がはんでいた。太郎はたいそう力持ちで相撲(すもう)が強かった。

そのころ村では、お祝い事があると神社(ほらのうす)で奉納相撲(ほうのうす)をしたり、よその村と対抗相撲(たいかうす)をしたりすることが多かった。

太郎はだんだん強くなって、負け知らずになった。みんなからもてはやされ、最近では勝つことをいいことに自分(おれ)ほど偉い(えらい)者(もの)はないと思うようになってきた。親は、そんな太郎が心配でならなかった。

「人をあなどるでないぞ。」
と、ことある毎(ごと)に言い聞かせていた。

ある時、村の娘が行方不明になった。羽束山の天狗にさらわれたらしいという噂(うわさ)であった。天狗をこわがって誰も



探しに行こうとしない。

そこで、太郎はひとりで羽束山へ登り始めた。ところが頂上に近づくほど風が強くなった。これは天狗のしわざにちがいない。やつこのことで頂上に着いた。風がびゅうびゅう吹く中で、

「やい、天狗！ 出てこい！」

と叫ぶが、何の返事も無い。ただ風がうなっているだけであった。次の日も登ったけれど、同じことだった。

三日目も登った。

「やい、天狗！ おるなら返事をしろ！」

「おお、ここにおるぞ。」

「姿を見せい！」

「ここだ、ここだ。かかってこい！」

「よし、いくぞ！ 娘を返せ！」

太郎は、声のする方にかかつていくが、でーんと押し返される。またかかつていくが、押し返される。何度やってもでーんと押し返され、とうとう力つきて倒れてしまった。

「もつとかかつてこんかい。」

「もうあかん。力が出んわい。」

「これしきのことへこたれてはいかん。さつき娘を返せと言ったが、一体どういうことだ？」

「佐吉さんとお幸さんをさらったやろ。」

「さらったりしない。何かの間違いじゃ。」

天狗はそう言いながら、次第に姿を現した。赤い顔、高い鼻。おそろおそろ見るとこわそうな顔つきの中にも優しさが感じられた。

「しかし、思い当たることがある。探してやろう。ところで太郎、お前は、相撲が強いから偉いと思っっているだろう。」

「いや、そのようなことは……。」

「力が強いだけでは本当の相撲取りではないぞ。本当の強さは相手を思いやる心が備わっていないければならぬ。」

これからは、力だけでなく心をこめて相撲をとれ。相手の気持ちや思いをくみ取り、相手の良さを素直に認めよ。」

じつと聞いていた太郎は、天狗の言葉が身にしてみた。自分は今まで相撲に勝ったと言っただけは、うぬぼれていた。自分は、もつともつと修行せねばならぬ、と心から思った。まもなくお幸さんは帰ってきた。天狗が返してくれたのかどうか、当のお幸さんにも、誰にもわからなかった。

それからというもの、太郎は人が変わったようになった。家の手伝いをよくし、相撲の練習も怠らなくなった。そのうち、親方の目にとまり、相撲部屋に入れてもらった。誰よりも熱心にけいこし、胸を借りた先輩には感謝し、一緒に励んだ仲間には礼を言った。

努力が実って関取になっても、天狗に教えられたことは胸から離れなかった。太郎の相撲は強いだけでなく、技や態度が観客を引きつけた。太郎が土俵に上がると

「いよー、ちからたろうー！」

「名力士、ちからたろうー！」

などと声援があがる人気力士になったそうなの。